

第19回

渋谷の 午後のコンサート。

2023.9.18(月・祝) 14:00開演 Bunkamura オーチャードホール

Mon./Holiday Sep. 18, 2023, 14:00 at Bunkamura Orchard Hall

〈秋の大感謝祭〉 〈Autumn Thanksgiving Festival〉

指揮とお話 角田鋼亮 Kosuke Tsunoda, conductor & speaker

ゲスト(ピアノ) 園田隆一郎* Ryuichiro Sonoda, guest(piano)

三ツ橋敬子* Keiko Mitsuhashi, guest(piano)

コンサートマスター 近藤 薫 Kaoru Kondo, concertmaster

ベルリオーズ：序曲『ローマの謝肉祭』(約10分)

Berlioz: Roman Carnival Overture (ca. 10 min)

サン＝サーンス：組曲『動物の謝肉祭』* (約25分)

Saint-Saëns: The Carnival of the Animals (Le Carnaval des animaux) (ca. 25 min)

— 休憩 intermission —

レスピーギ：交響詩『ローマの祭』(約25分)

Respighi: Roman Festivals (ca. 25 min)

外山雄三：管弦楽のためのラブソディ(約7分)

Yuzo Toyama: Rhapsody for Orchestra (ca. 7 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

協力：Bunkamura / In Association with Bunkamura

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために / Dear audience

♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪ All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned. ♪ Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed. ♪ Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance. ♪ Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

出演者プロフィール

指揮とお話 角田鋼亮

Kosuke Tsunoda, conductor & speaker

東京藝術大学大学院指揮科ならびにベルリン音楽大学国家演奏家資格課程修了。ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団、ブランデンブルグ交響楽団、札幌交響楽団、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京都交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団、九州交響楽団等と共演している。大阪フィルハーモニー交響楽団および仙台フィルハーモニー管弦楽団の指揮者のポジションを歴任。現在、セントラル愛知交響楽団常任指揮者を務めており、いま日本で最も期待される若手指揮者の一人として活躍の場を拓けている。2019年「令和元年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞」、2020年「名古屋市文化振興事業団第36回芸術創造賞」を受賞。
<https://www.kosuketsunoda.com/>



©Hikaru Hoshi

ゲスト(ピアノ) 園田隆一郎

Ryuichiro Sonoda, guest(piano)

東京藝術大学音楽学部指揮科、同大学大学院を修了。2006年、シエナのキジアーナ夏季音楽週間『トスカ』を指揮してデビュー。翌年、藤原歌劇団『ラ・ボエーム』を指揮して日本デビューを果たす。その後国内外のオペラへの出演、オーケストラとの共演を重ねる。2017年度第16回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。令和4年度(第73回)芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。



©Fabio Parenzan

ゲスト(ピアノ) 三ツ橋敬子

Keiko Mitsuhashi, guest(piano)

東京藝術大学及び同大学院を修了。ウィーン国立音楽大学とキジアーナ音楽院に留学。第10回アントニオ・ペドロッチ国際指揮者コンクールにて日本人として初めて優勝。併せて聴衆賞、ペドロッチ協会賞を受賞し、最年少優勝で初の3冠に輝いた。第12回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。2009年Newsweek Japan誌にて「世界が尊敬する日本人100人」に選出。一級小型船舶操縦士。



©Earl Ross

プログラム・ノート

解説＝飯尾洋一

時空を超えた“祭”を巡る旅

本日の公演は祭をテーマにした名曲を集めています。ベルリオーズが作曲したのは序曲『ローマの謝肉祭』。ルネサンス期のローマに思いを馳せた華麗な音楽です。一方、サン＝サーンスは組曲『動物の謝肉祭』で、動物たちの楽しいパレードをユーモラスに表現しました。なかには一風変わった登場人物も。レスピーギは交響詩『ローマの祭』で古代から現代に至る4つの祭を描きます。時を超えて祭を巡る旅とでも言えるでしょうか。おしまいは外山雄三作曲の「管弦楽のためのラプソディ」。こちらは日本の祭です。「ソーラン節」「炭坑節」「八木節」など、私たちにとってなじみ深いメロディが奏でられます。

ちなみに『動物の謝肉祭』でふたりのピアニストを務めるのは、園田隆一郎と三ツ橋敬子。ふだんは指揮者として活躍するおふたりです。本日のマエストロ、角田鋼亮とは同窓、同級の間柄なのとか。舞台上に指揮者が3人もそろうのは珍しい光景ですね。



マエストロ角田を中心に3人の気鋭の指揮者による豪華共演！〈秋の大感謝祭〉をどうぞお楽しみください

謝肉祭の熱気を伝えるベルリオーズの人気作

「ローマは私の知るなかで、もっともばかばかしく、うんざりする街である。頭や心を持つ人のいるべきところではない」

ローマを訪れたフランスの作曲家**エクトル・ベルリオーズ** (1803-1869) はそんな辛辣な言葉を残しています。ローマの街に失望したベルリオーズでしたが、代わって彼を魅了したのはルネサンス期イタリアの彫金師ベンヴェヌート・チェッリーニの自叙伝でした。自叙伝を読んで感激したベルリオーズは、これを題材にしたオペラを作ろうと考え、16世紀のローマの謝肉祭を背景としたオペラ『ベンヴェヌート・チェッリーニ』を書きあげます。初演は1838年、パリ・オペラ座にて。ところがこのオペラは聴衆の趣味に合わず、散々な失敗に終わってしまい、ベルリオーズは「拷問台にかけられた」ような苦しみを味わいます。

ベルリオーズ本人にとって、このオペラは「おそらく二度と見出しえないような多様な楽想とエネルギー、豊かさ、輝かしい色彩を含んでいる」と述べるほどの自信作でした。そこで、ベルリオーズは『ベンヴェヌート・チェッリーニ』で用いた素材を転用して、**序曲『ローマの謝肉祭』**に仕立てます。作曲者自身の指揮によりパリで行われた初演はアンコールを求められるほどの大成功に。以来、ベルリオーズの人気作として、現在でも高い人気を誇っています。

曲は謝肉祭の興奮を伝えるかのように勢いよく開始され、これに夢想的な愛の主題が続きます。やがて祭の情景に転じ、陽気で熱気にあふれた楽想が展開されます。



フィレンツェにあるベンヴェヌート・チェッリーニの像 ©stock.adobe.com

9/18

渋谷の
午後の「コンサート」

悪ノリ気味のユーモアと遊び心溢れる組曲

19世紀のフランスの音楽界をリードした大作曲家が**カミーユ・サン＝サーンス** (1835-1921) です。交響曲や室内楽曲、ピアノ曲、オペラなど、さまざまな分野に多数の作品を残していますが、その中でもっとも親しまれているのは**組曲『動物の謝肉祭』**でしょう。



といっても、サン＝サーンスは生前、『動物の謝肉祭』を公開で演奏することを固く禁じていました（「白鳥」だけは例外です）。この曲は1886年、知人が開いたプライベートな演奏会のために書かれたもので、当時のほかの作曲家のパロディを含むなど、悪ノリ気味のユーモアが散りばめられていました。おそらくサン＝サーンスは公にするにはふさわしくないジョーク集とみなしたのでしょう。

第1曲 序曲と獅子王の行進 百獣の王が誇らしげに行進します。

第2曲 雄鶏と雌鶏 コッココツツ……コケコッコー! の鳴き声が聞こえます。

第3曲 驃馬 曲名は本来「アジアノロバ」のこと。ピアノふたりの高速かけっこ。

第4曲 亀 「フレンチカンカン」を超スローモーションで。

第5曲 象 巨体の象が踊るワルツ。

第6曲 カンガルー ぴょんぴょんと跳ねるかのよう。

第7曲 水族館 ゆらゆらと魚たちが泳ぐ神秘的な光景。

第8曲 耳の長い登場人物 ロバ、あるいは特定の音楽評論家への皮肉という説も。

第9曲 森の奥のカッコウ 遠くから聞こえるカッコウの鳴き声。

第10曲 大きな鳥籠 縦横無尽に飛び回る小鳥たち。

第11曲 ピアニスト これも動物!? 下手なピアニストを描写。

第12曲 化石 もう生きていない動物。恐竜の化石。

第13曲 白鳥 優美な白鳥の姿をチェロが表現。

第14曲 終曲 みんなそろって愉快的気分で幕。

古代から現代までのローマの祭を描き出す交響詩

イタリアのボローニャに生まれた作曲家**オットリーノ・レスピーギ**(1879-1936)は、1913年にローマのサンタ・チェチーリア音楽院の作曲科教授に就任しました。ローマの遺跡や伝統文化に惹かれたレスピーギは、この街にインスピレーションを得て、交響詩『ローマの噴水』『ローマの松』『ローマの祭』なる「ローマ三部作」を作曲しました。いずれの作品にもレスピーギならではの色彩感豊かなオーケストレーションが施されています。1928年、三部作の最後に書かれたのが**交響詩『ローマの祭』**。三作のなかでもとりわけ華やかで描写的な作品です。



第1曲 チルチェンセス 舞台は古代ローマ時代の円形競技場。キリスト教徒と飢えた猛獣を戦わせる残忍な見世物が行われています。ファンファーレが鳴り、熱狂する市民たち。聖歌が聞こえます。祈りもむなしく、キリスト教徒は猛獣の餌食にされます。

第2曲 50年祭 巡礼者たちが街道をゆっくりと歩いています。目指すはローマ。50年ごとの聖年祭では、教皇がローマ巡礼者に特別の赦しを与えるのです。モンテマリオの丘を登った巡礼者たちはローマを目にして賛歌を歌い、これに鐘の音が応えます。

第3曲 10月祭 ローマ東南のカステッリ・ロマーニはワインの産地として知られています。ぶどうの収穫祭がにぎやかに開かれます。中盤でマンドリンが奏でるのは夕べのセレナーデ。甘くけだるい愛の音楽が続きます。



カステッリ・ロマーニ地方の町カステル・ガンドルフォとアルバーノ湖の景観

©stock.adobe.com

9/18

渋谷の
午後の「コンサート」

第4曲 公現祭 ナヴォーナ広場は公現祭の前夜。人々は羽目を外して大騒ぎ。物売りの声や手回しオルガン、酔っぱらいの歌、民衆歌が入り乱れ、狂騒のフィナーレを迎えます。

9/18

日本人におなじみのメロディが次々と現れる管弦楽曲

今年7月、指揮者として、また作曲家として戦後日本の音楽界を率いた**外山雄三**（1931-2023）が92歳で世を去りました。作曲家としての代表作として挙げられるのが「**管弦楽のためのラブソディ**」。1960年、NHK交響楽団が世界一周の海外演奏旅行を敢行した際に、アンコール・ピースとして作曲されました。



日本の民謡を素材として用いたこの作品は各地で好評を博し、以来、日本のオーケストラが海外公演でしばしば演奏する定番曲となっています。また、学校などの音楽鑑賞教室でも広く演奏されています。

西洋楽器によるオーケストラに、拍子木や和太鼓など日本の音が加わって、日本人ならだれもが知るおなじみのメロディが次々と登場します。拍子木などの打楽器を主体とする活発な序奏に続いて、トランペットによる「**あんたがたどこさ**」が姿をあらわします。これに加わるのが「**ソーラン節**」「**炭坑節**」「**串本節**」。いったん曲が静まり、鈴の音が鳴らされると、フルートによる「**追分節**」が続きます。ふたたび拍子木が打たれると、威勢よく「**八木節**」が始まって、エネルギッシュなクライマックスを築きます。

いいお・よういち（音楽ジャーナリスト）／著書に『クラシック音楽のトリセツ』（SB新書）、『R40のクラシック』（廣済堂新書）、『マンガで教養 はじめてのクラシック』監修（朝日新聞出版）、『クラシックBOOK』（三笠書房）他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。